

ライフライン

Cmajor7

鋸齒の海岸線が

運命をギザギザに切り分けた

その境界に立ちすくむ時

人は何処へと向かい

歩き出そうとするのか

思い思いの花を一輪

胸に抱いて

部屋が片付けられない
どうせいつかは自分が片付くのだから

自殺なんてありえない
不治の病という響きになぜか憧れている

自分が何をすべきか知らぬまま
淡々と日々のノルマを果たす

親しい人とは無性に離れたくなる
場が盛り上がってくると帰りたくなる

ここに書くだけ無駄な気もする
特に感想などいらない

沈丁花の冷たさに
閉じられた小さな世界を
こよなく愛したその人は
ゆるやかに
疲弊の底へと
降りていく

考えることと
書くことと

分類すること
中和すること

いくつもできた細長い
水溜りの鏡の中に
今日という日は
すでに傾き始めている

自我

支柱

愛着

名誉

慈悲

美意識

安眠

消
去
法

兎が給水瓶から水を飲む
軽快な音とリズム

限りある目の前の生命が
活動する音とリズム

生きる意味など
問うわけではなく
何かを信じて
疑わぬりずむ

酷暑の日々に

どれだけ
癒されたことか

誰か わたしを否定して

誰か わたしを笑って

誰か わたしを匿って

誰か わたしを投げ返して

巡り巡って

何かが変わるかも知れない

変わらないかも知れない

誰か わたしを受け止めて

そうは言っても
世間なんてものは

つまらないものと
くだらないものと
わからないものの 集まりで

分類するだけで
日が暮れる

世間知らず

詠み人知らず

郷に入らば
直感に従え

イルミネーション街のそこそこには
温室から出荷されたばかりの
造花まがいの植物が溢れ
誰に宛てるでもない空々しい文面の
年賀状の見本が張り巡らされ
そのどれもが数日後には色褪せていく

無言の回覧板がぐるぐる回る
隣近所はこぞって窓ガラスを磨き立て
そこに映る者を拒絶するかのよう

地を這う虫けらのごとき吾の生業と
来るべき輝かしい新年の間にある断層は
オーバーハングの氷壁さながら
眼前に迫り来る今日の憂うつ

喝！

報われることのない
旧家族制度の亡霊たちが
うごめきひしめき
がんじがらめ
この
退屈で窮屈な
家を出て
新たな居場所を
見つけよう
生存報告のためだけの
賀状なら無用
全ての生死に報いるため
新たな年に
生まれ変わるのだ

あたしたちは比重が違うから
混じりあう事などできないの
離れているのが寂しいのなら

いつまでもずっとずっとその
瓶を振り続けていたらいいわ
生野菜なんかにかけたりせず

結婚前は両目を開けて
結婚したら片目を閉じろと
人は言う

何のために？
何代も受け継がれてきた
搾取と虐待と浪費の連鎖を
覆い隠すために？

こころの両目を閉じないように
今この現実を見つめよう
見えない絆とDNAの
螺旋階段上における取り引き

隣人が差し出したジョーカーを
ポーカーフェイスで選んだのは
自分だろう
死神か道化師なのかも
最後までわからずに

父は生き物が嫌い
家に居ついた野良犬を
自転車で捨てに行き
橋の下に繋いで帰ってきたが
犬はロープを食いちぎり
先に自宅に戻ってた

母は猫が嫌い
土足で家に入り込むから
そんな汚らしい猫
橋の下に捨ててきなさい！
子猫を抱いて行った
近くの橋の下には
増水した川の
流れがあるばかり

わたしには子供もない
血は繋がっていないけれど
みんな本当の孫だと思ってる
その3人の中でも
あんたが一番大好き
たぶん僕はその
なんちゃって祖母のおかげで
人間不信にならなかった

ちぎれ雲には割れた月

並んでベンチに腰掛けて

あの日確かに我々は

胸の奥で語っただろう

どこまでも

纏わり付くかの絶望を

足蹴にし

笑い捨て

その冷酷さには

我ながら

惚れ惚れしつつ

ぞっとする

忘るることなき渴望を

覆い隠すはちぎれ雲

結び目。

迷彩のプラタナスの枝には

いくつもの結び目がある

芽吹いたばかりの梢が

淡い影を帯びて

空に浮かぶ

ドラッグストア ネットカフェ

交差点は空想と現実の岐路

ぼくはいつも ここにいるよ

曲が変わって

マナーモードの携帯電話が

微かに震えた気がした